

[粕屋演習林]2. 鹿児島県屋久島のヤクスギ天然林および三重県尾鷲のオワセスギ天然林からの育種材料のしゅう集について

宮島, 寛
九州大学農学部附属演習林 : 教授

柳池, 一馬
九州大学農学部附属演習林 : 林業手

長沢, 久視
九州大学農学部附属演習林 : 林業手

<https://doi.org/10.15017/1462094>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和46年度, pp. 98-100, 1972. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :



クローン番号	さし付本数	発根本数	クローン番号	さし付本数	発根本数
N03-17	6	5	N03-34	6	2
18	2		35	3	4
19	3	3	36	7	5
20	1	1	37	2	1
21	3	3	38	3	1
22	5	4	39	6	3
23	4	4	40	3	1
24	3	1	41	4	
25	1		42	3	3
26	3	2	43	6	4
27	4	3	44	8	4
28	3	3	45	6	
29	6	5	46	3	1
30	3		47	3	1
31	3	2	48	4	2
32	2	2	49	2	2
33	4	2			

2. 鹿児島県屋久島のヤクスギ天然林および三重県尾鷲のオワセスキ天然林からの育種材料のしゅう集について

宮崎安貞・柳池一馬・長沢久視

ヤクスギは、暖帯系スギの最大の根源地であり、現存する唯一の遺伝子の宝庫である（佐藤、井上、1961）といわれている。ヤクスギ天然林はいろいろな形態をもつた混生群でたいへん変異の幅の広いものであり、とくに九州在来品種のなかには、ヤクスギとの深い関係がうかがわれるものが少なくないようである。柏屋演習林林木育種試験地では、昭和46年度文部省科学研究費の総合研究A、岐阜大学有田班の分担研究の一環として、表題のヤクスギ、オワセスキの他アキタスギ天然林からそれぞれ材料のしゅう集を行なつた。このうちアキタスギは全

く発根個体が残らなかつたので前2者についてさし木増殖の成績を述べることとする。

ヤクスギ

昭和46年10月下旬に下屋久當林署85林班の小花山付近に試験地を設定して、うち80個体から力枝付近の枝を採取し、これを九大に運んでさし穂計1,857本をさし付けた。このうち38個体分464本が発根した。ヤクスギは一般に発根しにくいといわれているが、高樹令がその一因と考えられる。この実験では全体として約25.0%の発根率を示したが、個体によつて発根しやすいものとしにくいものとがあることが判つた。とくに胸高直径9.3cmの1個体は、さし付けた36本中30本が発根したが、このことは注目に値しよう。最も大きなヤクスギでは胸高直径12.9cmのものから発根個体4本が得られている。

オワセスギ

一方、三重県の尾鷲地方のオワセスギ天然林では、昭和46年11月8~14日に尾鷲當林署108林班に調査地を設けて50個体から力枝を採取し、11月16~17日に穂作りさし付けた。さし付本数は874本であつた。このうち24個体分138本が発根した。発根率は約16%である。両天然林から得られた発根個体は表1に示す通りである。

ヤクスギ		オワセスギ	
クローン名	発根個体数	クローン名	発根個体数
YK 5	2	OW 1	3
YK 6	3	OW 2	9
YK 7	1	OW 3	3
YK 8	6	OW 5	6
YK 9	4	OW 6	1
YK 10	1	OW 7	1
YK 12	1	OW 9	1
YK 13	10	OW 10	1
YK 14	27	OW 11	1
YK 15	27	OW 12	2
YK 16	23	OW 13	3
YK 17	12	OW 15	4
YK 18	32	OW 17	1
YK 32	13	OW 21	1
YK 33	19	OW 38	1
YK 38	11	OW 39	3
YK 39	19	OW 40	2

YK 4 0	3 0	OW 4 1	1 2
YK 4 1	2 5	OW 4 2	5
YK 4 2	1 5	OW 4 3	6
YK 4 3	1 2	OW 4 4	2 9
YK 4 4	1 2	OW 4 5	7
YK 4 5	1 1	OW 4 7	1 2
YK 4 6	1 6	OW 4 8	6
YK 4 7	1 8	OW 4 9	1 5
YK 4 8	2 6	OW 5 0	3
YK 4 9	2 0		
YK 5 0	1 0		
YK 5 1	7		
YK 5 2	1 4		
YK 5 3	7		
YK 5 4	5		
YK 5 5	6		
YK 5 7	3		
YK 5 8	7		
YK 6 0	6		
YK 7 1	1		
YK 7 4	2		

3. ダイアレル。クロスによるヒノキ、ローソンヒノキ、アラスカヒノキの種内および種間交雑に関する研究

宮島 寛・宮崎安貞・田島正啓

この研究は、ヒノキ属の3樹種すなわちヒノキ、ローソンヒノキ、アラスカヒノキについて種内・種間交雫に関する諸問題を究明するために1972年3月から始めたものである。始めたばかりでどのように研究を展開するかまだ流動的に考えている点も少なくないが、ここではその経過を報告する。

母 樹

交配に用いたヒノキは、1964年4月に粕屋演習林林木育種試験地構内に集植されたヒノキの精英樹つぎ木クローンである。クローン数は28で、1クローン当たり4~16本を試験用